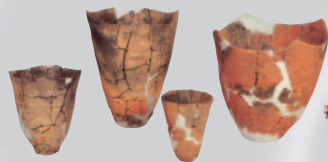


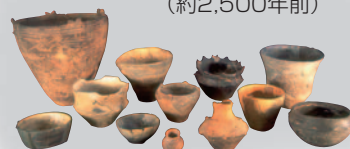
縄文時代の土器
(約10,000年前)



縄文時代の土器
(約6,000年前)



縄文時代の土器
(約4,500年前)



縄文時代の土器
(約2,500年前)



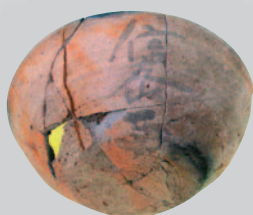
弥生時代の土器



古墳時代の土器



古墳時代の土器



文字が書かれている
平安時代の土器



平安時代の土器



奈良時代の土器

福島市の遺跡

3

Sites of Fukushima city

はじめに

福島市内には1000カ所を超える遺跡^{いせき}があり、およそ2万年前の旧石器時代^{きゅうせっきしだい}から江戸時代までの人々が生活をした痕跡^{こんせき}を今に伝えています。

福島市では、これまで60カ所以上の遺跡の発掘調査を行い、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の人々の生活の様子や社会の様子の一部が明らかになっています。

遺跡はどこにあるのでしょうか？じつは、私たちが普段^{ふだん}とおっている道のすぐそばに遺跡はあります。身近なところに、私たちの生活の土台となった先人が残した生活の跡が埋まっているのです。

福島市でも、社会の教科書に書かれている時代に、私たちの祖先が、私たちが生活している近くで、生活をしていたのです。

この本は、これまで発掘調査を実施した遺跡の中から、先人の暮らしびりがよくわかる遺跡を選び、発掘調査で明らかになった先人の生活の様子を伝えることを目的に作成しました。

これまで、市内各地区の遺跡を紹介しましたが、今回は、信夫地区、松川地区、飯野地区での発掘調査で明らかになった遺跡を紹介します。

いつの時代に、どのように先人が生活をしていたのか知っていただき、学校での調べ学習で活用していただきたいと思います。

目

次

発掘調査とは	1	仙台内前遺跡	12
市内の移り変わり	2	小倉向A遺跡	13
麦地石遺跡	3	宇輪台遺跡	14
宮畑遺跡	4	和台遺跡	16
名倉城跡	6	白山遺跡	18
稻荷塚古墳・八幡塚古墳跡	7	八丁目城跡	19
大森城跡	8	用語説明	20
城裏口遺跡	9	年表	22
南諏訪原遺跡	10		

発掘調査とは

現在、日本に残る古い建築物は、7世紀の法隆寺金堂が最古のものです。それ以前の建物は木や植物で作られていたため、腐ってしまに残っていません。

福島市では、約2万年前から人間が生活をしていました。どんな家に住み、どんな生活をしていたかを知る手がかりが発掘調査なのです。

発掘調査では、当時の家の跡や柱を立てた穴、井戸、食料をたくわえた穴、墓などの様子や土器や石器などの道具から、昔の人々がどのように生活していたのかを知ることができます。

発掘調査の様子



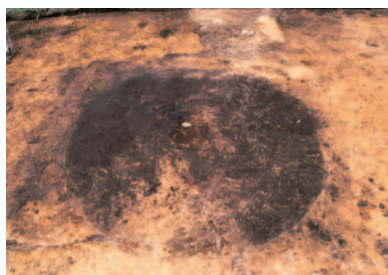
発掘調査では家の跡などのほかに、当時使われていた土器などもみつき、生活の様子を知ることができます。



発掘調査では地面を平らに削って、当時の地面をていねいに調べることから始まります。

たてあなじゅうきょ

竪穴住居の調査の様子



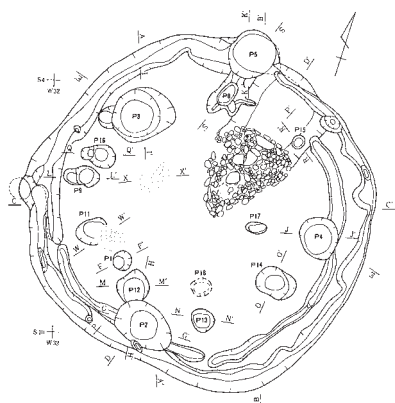
竪穴住居を発見した様子です。中央の黒い円が竪穴住居です。



竪穴住居を掘っている様子です。へらで少しずつ掘っていきます。



竪穴住居を掘りあげた様子です。柱の穴の大きさや深さを確認したり、当時のいろりなどを調べます。



◀ 竪穴住居の図面

右上の写真まで調査が進んだ段階で、写真を撮影し、図面を作成します。左の図は右上の竪穴住居の図面です。竪穴住居の形や大きさ、柱の位置と大きさ、いろりなどを図にします。

市内の移り変わり

福島市でみつっている最も古い時代の生活の跡^{あと}は、今からおよそ2万～1万5千年前に石器を作った場所（黒岩・学壇遺跡^{がくだん}）で旧石器時代のものです。

やがて縄文時代が始まると、人々は堅穴住居^{たてあなじゅうきょ}を作って住むようになります。市内で最も古い堅穴住居（松川町・仙台内前遺跡^{せんだいうちまえ}）は縄文時代が始まってまもなくつくられたもので、およそ1万年前のものと考えられます。その後、次第に家の数がふえてむらをつくるようになり、縄文時代もなかばをすぎると、川の近くに大規模なむらがつくられるようになります（飯坂町・月崎A遺跡^{つきざき}、松川町水原・宇輪台遺跡^{うわだい}、荒井・愛宕原遺跡^{あら}、飯野町・和台遺跡^{わだい}など）。岡島の宮畑遺跡^{みやはた}にむらができたのもこの頃です。

弥生時代のむらはみつっていないため、詳しくわかっていませんが、勾玉や矢じり^{まがたま}を作っていた場所や水田跡（野田町・勝口前畑遺跡^{かつくちまえはた}）のほか、お墓の跡（佐原・大平後関遺跡^{おほらごせき}）などがみつっています。これらのことから、稲作をしながら、川そばの低地にむらをつくっていたことがわかります。

古墳時代になると下鳥渡地区に古墳がつくられ、福島は古墳をつくった豪族^{こうぞく}によって支配されていました。古墳時代の終わり頃には特に、盆地の東側斜面に小さな古墳がたくさんつくられるようになります。

また、古墳時代の終わりには有力豪族により、お寺が建てられました（腰浜町・腰浜廃寺跡^{こしはまはいじ}）。

奈良時代から平安時代にかけては福島は国家の支配下にありました。信夫郡の郡役所^{しよ}も置かれていたようです（北五老内町・北五老内遺跡^{きたごろううち}）。

古代の終わりに飯坂町の大鳥城^{おおとりじょう}を拠点に強い力を持っていた佐藤氏^{さとう}は、鎌倉幕府の勢力によってその力を失い、以後、伊達氏^{だてし}の支配の中に取り込まれていきます。この期間には杉目城^{すぎのめじょう}（福島城^{ふくしまじょう}）や大森城^{おおもりじょう}をはじめとして大小さまざまな城館^{じょうかん}がつけられました。

江戸時代には福島城を中心とした支配体制^{しはいたいせい}ができあがりますが、福島の統治^{とうち}は幕府領—福島藩（本多氏^{ほんだ}）—幕府領—福島藩（堀田氏^{ほった}）—幕府領とめまぐるしく変わったのち、18世紀になって板倉氏^{いたくら}の支配下になります。

麦地石遺跡

■遺跡名……麦地石遺跡

■所在地……福島市松川町金沢字麦地石

■時代……縄文時代・奈良時代・
平安時代・中世

■調査年……平成5・7年

詳しくは

ふくしまの歴史1 原始・古代
p 230・231に掲載



麦地石遺跡は、松川工業団地の造成に伴って、発掘調査が行われ、奈良時代と平安時代のムラが発見されました。奈良時代（約1,200年前）の住居跡1軒、平安時代（約1,100年前）住居跡20軒のほか、縄文時代の落とし穴などもみつっています。

平安時代の住居跡のうち、9軒は焼けた住居でした。床の近くから炭化した木材（丸太や細いもの、板状のものなど）がみつかりました。住居の中央から放射状に広がるもの、壁に沿って並んでいるものなどがありました。また、炭化材の下からは、焼けた土もみつっています。炭化材・焼けた土の状況から、炭化材は屋根の骨組み（梁・桁・垂木など）と考えられています。おそらく屋根は骨組みの上に下地を作り、その上に土を載せ、さらに草をかけていたようで、草などが燃え落ちた後に落下した土が被り、完全に燃え切らずに残ったと考えられます。

他に、縄文土器、平安時代の土器や木製品（鋤などの農具）などもみつっています。



▲麦地石遺跡

遺跡は国道4号線バイパスの西側にあります。住居などは山の緩やかな斜面に存在していました。北側の沢では土器や木製品がみつっています。



▲住居のカマド

平安時代（約1,100年前）の住居で使われていたカマド。火熱を受けているため、赤く焼け締まっている。中央に見える穴は煙を出すためのトンネル。



▲住居の屋根材

住居の屋根に使われた木材が燃え落ちた様子。屋根に載せた土が落下し、空気を遮断する役目をした結果、木は燃え切らずに炭となって残った。このような住居が9軒みつっています。



▲発掘調査の様子

炭や焼けた土の形を少しずつ出していきます。分析の結果、屋根の材料にはクリ・ヌルデ・ケヤキなどのほか、合わせて14種類もの木が使われていたことがわかっています。

宮畑遺跡

■遺跡名……宮畑遺跡

■所在地……福島市岡島字宮田、
宮畑、天神平

■時代……縄文時代

■調査年……平成6年～平成20年

詳しくは

ふくしまの歴史1 原始・古代
P 41・42・47・49・56・60～67
・69・72に掲載



宮畑遺跡は、月輪小学校の東にある福島工業団地の入口にあります。縄文時代には、遺跡のすぐ東側を阿武隈川が流れていた可能性が高く、阿武隈川近くで生活をした縄文人のむらがあった遺跡です。

宮畑遺跡では、縄文時代中期・後期・晩期の縄文人の生活の痕跡が確認されています。

縄文時代中期の集落は、これまで47棟の竪穴住居の調査を行っていますが、土を載せた屋根であったことが明らかになっています。集落の大きな特徴は、40%を超える竪穴住居が焼かれていることですが、これほど多くの竪穴住居を焼いている集落は、全国的に例がありません。同じ縄文時代中期の集落跡である和台遺跡（飯野町）でも、発見された230棟の竪穴住居に焼かれた家はありません。なぜ、宮畑遺跡では数多くの家を焼いたのか、その原因はまだわかっていません。

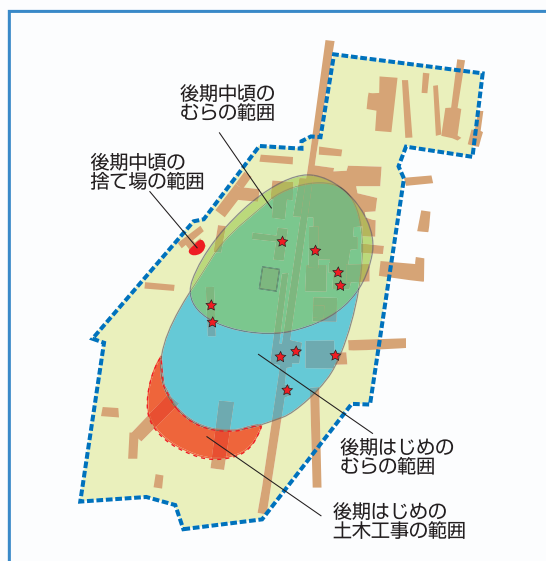
縄文時代中期の集落は約4,000年前になくなり、縄文時代後期前葉に、関東地方で流行した敷石住居しきいしじゅうきょを伴う新たな集落がつくられます。集落南西にあった湿地は、土器を多量に含む土で、南北30m×東西60mを超える範囲で埋め立てが行われています。

敷石住居は縄文時代後期の中ごろには姿を消しますが、むらは北側にやや規模を縮



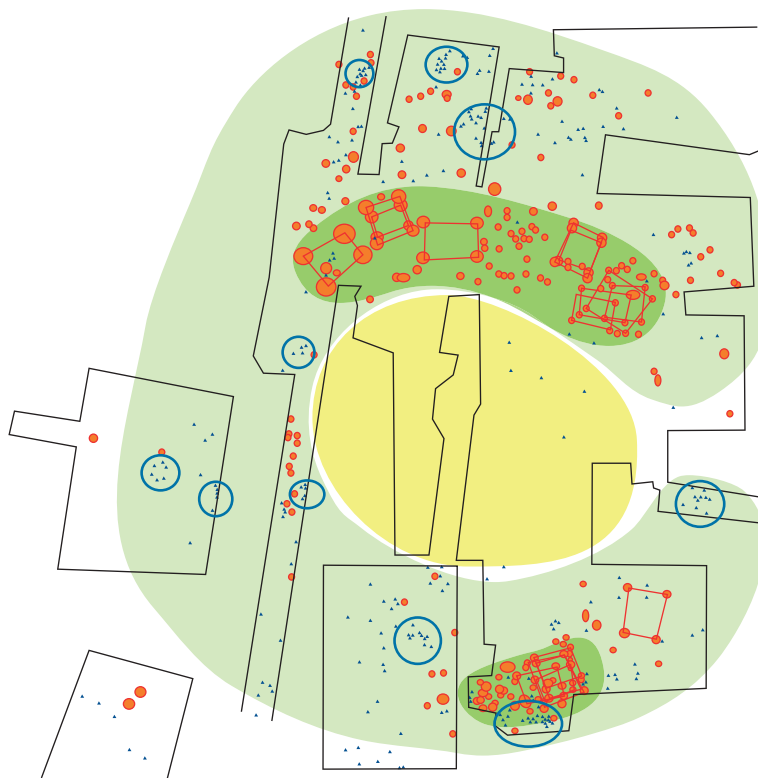
▲中期のむら

青い部分が竪穴住居跡のある範囲で、西側のほうには住居のない広場があり、そこを囲むようにむらが作られています。



▲後期のむら

後期のはじめには集落の南側の低地が埋められ、後期中頃には西側の斜面に捨て場が作られます。また、関東地方の影響を受けた平らな石を敷きつめる敷石住居しきいしじゅうきょ（星印）が作られるのもこの頃です。



◀ 晩期のむらのひろがり

広場（黄色い部分）を囲んで柱穴（赤い丸）と掘立柱建物（赤い丸を線でつないだもの）、埋甕（青い三角）が作られています。薄緑色の部分が掘立柱建物の作られた範囲で、濃い緑色の部分にとくに集中しています。また、埋甕もいくつかまとまっているところ（青い丸）が見られます



▲ 宮畑遺跡最大の掘立柱建物

直径2 m深さ2 mの穴を掘ってその中に直径90cmの柱を立てています

小しながら営まれます。遺跡西側の阿武隈川へ傾斜する斜面では、まだ使うことができる土器を捨てた、もの送りの場が発見されています。

縄文時代晩期には、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物が広場を囲む形で、南北60m、東西40mの範囲で環状（ドーナツ形）に確認されています。その外側に^{うめがめ}埋甕（子供の墓）が伴い、竪穴住居は、これまで発見されたのは4棟だけです。掘立柱建物跡と埋甕群には密接な関係があり、掘立柱建物跡は日常生活のための施設というより、埋甕への子どもの埋葬に関連する施設の可能性があります。中には、全国でも最大級の直径90cmの柱を使った掘立柱建物も存在しています。

発掘調査では、河川や湿地に堆積した土で花粉分析を実施していますが、集落周辺はドングリ^{くるみ}のなるコナラを中心とした森林が広がり、クリ、オニグルミ、トチノキが存在したことが明らかになっています。木の実を割る道具やすりつぶす道具が出土していることから、木の実をすりつぶして団子状の食べ物に調理していた可能性も考えられます。

そのほか、新潟県のヒスイや日本海側で産出するアスファルト、伊豆半島の^{こくようせき}黒曜石など、遠いむらとの交流を示すものも発見されています。

名倉城跡

■遺跡名……名倉城跡

■所在地……福島市佐倉下字館

■時代……平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代

■調査年……平成11年

詳しくは

ふくしまの歴史 2 中世
P 71・234に掲載



名倉城跡は別名を亀ヶ城とも呼ばれ、荒川と須川の合流地点から荒川側を1 kmほど上流に上った場所にあります。室町時代から江戸時代にかけては、松川から大森－庭坂、そして米沢へ至る米沢街道の通り道でした。発掘調査は北側の堀と土塁の一部分が行われ、鎌倉時代から室町時代にかけての城館跡であることがわかりました。堀跡からは陶磁器などのほか、刃物による傷のついた鹿や猪の骨もみつかり、当時城館に住んでいた人々の食生活を垣間見ることができます。

名倉城跡は、鎌倉～室町時代の平地にある城館としては規模が非常に大きすぎることや、城跡内に今も残る地割りの様子などから、領主の館というよりも、土塁や堀で囲われた街道沿いの宿場町のような存在だったのではないかと考えられています。



▲名倉城跡

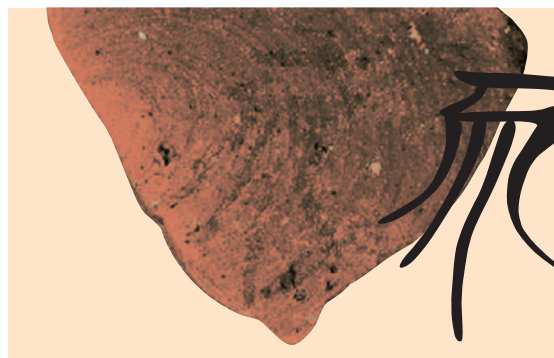
上が北です。東西200m、南北250mの広さがあります。中央の南北方向の農道は、城館当時の通路と思われる、その両側に東西に細長い地割りが残っています。道路に面して両側に屋敷が連なる様子は、領主の館やその家臣の屋敷というよりは、まるで現在の商店街のような光景です。

また、発掘調査では、奈良～平安時代の土師器・須恵器も見つかり、名倉城が造られる以前は奈良～平安時代のムラが広がっていたと思われます。見つかった須恵器には、「則天文字」という、中国で一時期しか使われなかった珍しい文字が墨で書かれてあるものもありました。



▲堀跡から見つかった遺物

左上が青磁碗、その右側が白磁皿で、どちらも室町時代に中国から輸入されたものです。その下が甕と鉢で、鎌倉時代に地元に作られました。骨は、一番左が猪、右の2つが鹿で、いずれも刃物で切った傷があります。



▲墨書土器

平安時代の須恵器の底の部分です。則天文字「天」の文字が墨で書かれてあります。則天文字は、中国周の皇帝則天武后（624～705）が決めた文字で、則天武后の死後はあまり使われなくなりました。

いなりづかこふん・はちまんづかこふんあと 稲荷塚古墳・八幡塚古墳跡

■遺跡名……稲荷塚古墳・八幡塚古墳跡

■所在地……下鳥渡字稲荷塚・八幡塚

■時代……古墳時代

■調査年……平成元年・7年

詳しくは

ふくしまの歴史1 原始・古代

稲荷塚古墳 P 106・108・109・137・277

八幡塚古墳 P 106・110・111・137・277に掲載。

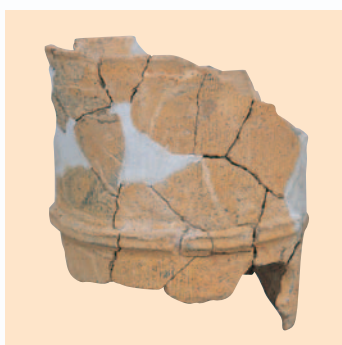


稲荷塚古墳 下鳥渡字稲荷塚にあり、市道拡幅計画に伴う試掘調査の結果、42mの円墳に11mの張出部を伴う形の規模であると考えられています。試掘調査では、いつ古墳が作られたかを示す遺物の出土はありませんでしたが、古墳の近くで5世紀後半の須恵器が見つかっており、古墳となんらかの関係のある遺物の可能性が考えられています。

このことから、稲荷塚古墳は、現在のところ福島市内最古の可能性のある古墳とされています。

八幡塚古墳 下鳥渡字八幡塚にあり、調査の結果、45.5mの帆立貝形をした形であったことが明らかになっています。周囲の溝から円筒形の埴輪が見つかることから、古墳上には埴輪がすえられていたと考えられます。この埴輪の特徴から、5世紀終わりから6世紀はじめに作られた古墳であるとされています。

稲荷塚古墳、八幡塚古墳とも、5世紀後半から6世紀はじめに、現在の下鳥渡を中心とした地域を治めた豪族の墓です。5世紀には、国見町周辺に福島盆地で最も大きな勢力をもった豪族がいたと考えられていますが、福島盆地の南部にも、有力な豪族がいたことを示す古墳といえます。



◀ 八幡塚古墳出土埴輪
円筒埴輪といわれる筒状の埴輪。



▲ 八幡塚古墳の現況



▲ 稲荷塚古墳の現況



▲ 1958(昭和33)年当時の八幡塚古墳

大森城跡

■遺跡名……大森城跡

■所在地……福島市大森字北館・椿館
・本丸・南館

■時代……戦国時代～江戸時代

■調査年……平成6年

詳しくは

ふくしまの歴史 2 中世
p 45・72・179・180・182・
226に掲載



大森城跡は、^{しのぶ}信夫中学校の西にある丘陵上に築かれた山城です。頂上は、大森城山公園になっており、桜が咲く季節には多くの市民が訪れます。公園の一番高い平坦面が本丸で、その北・東・西側は、傾斜が約60°の急な斜面になり、さらに、空堀や土塁をめぐらせ、守りを固めていたため、容易に攻められない城でした。

大森城は、伊達晴宗（伊達氏第15代）によって築かれたとされます。当時、信夫郡は伊達氏が支配していましたが、米沢から二本松に通じる街道がふもとを通る大森城は、信夫郡南半の守りを固めるための重要な城でした。初め、伊達実元（晴宗の弟）が城主となり、城のふもとには城下町がつけられました。天正14（1586）年には伊達政宗の家臣、片倉小十郎景綱が城主となりました。天正18（1590）年の豊臣秀吉の奥羽仕置により、信夫郡は伊達氏の支配ではなくなり、天正19（1591）年以降、城は一時廃止されますが、慶長3（1598）年、信夫郡が上杉氏の領地となり、大森城は上杉氏の城として復活します。そして寛文4（1664）年、信夫郡は江戸幕府の領地となり、大森城は廃止されました。

北館の展望台の建設にともない、平成6年に発掘調査が行われ、大森城に関連すると考えられる遺構が発見されています。



▲大森城跡全景

北西から見た大森城跡。写真右側を斜めに縦断している道路は東北自動車道、写真左上の建物は信夫中学校。



▲空堀跡

本丸跡から南に少し下ったところにあり、城だった頃の面影をよく残しています。現在、その上にコンクリート製の太鼓橋がかけられています。

じょうらぐちいせき 城裏口遺跡

■遺跡名……城裏口遺跡

■所在地……福島市山田字城裏

■時代……縄文時代・古墳時代末～
奈良時代初頭

■調査年……平成9年



城裏口遺跡は、福島市街地から4.5kmほど南西に位置します。市道拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、古墳時代末～奈良時代初頭の住居跡が2軒みつかりました。大きさは4～5m四方と思われます。うち1軒では床に粘土が散らばり、古い瓦もみつかりました。かつて城裏口遺跡の西隣りには、古代の瓦を焼いたとされる城裏口瓦窯跡があったようで、地形などをみても、調査区域も含めた尾根一帯には窯跡が点在すると考えられています。このような状況から、みつかった粘土は土器・瓦の製作に使われたもので、この住居跡はふだん暮らしていた家というより、須恵器や瓦を作っていた工房と考えられています。また、この住居跡からは須恵器もみつかっています。普通の須恵器は青い色をしています、十分に焼けていない、赤い色の須恵器（約1,350～1,300年前）がたくさんみつかりました。



▲城裏口遺跡

遺跡は小高い山の南斜面にあります。中央の山肌が見えている所が調査を行った場所。周辺には瓦を焼いた窯跡が広がっていると考えられています。



▲工房の跡

古墳時代末～奈良時代初めごろの工房跡。床には粘土や生焼けの須恵器が散らばっていました。土器や瓦を作る作業場のような施設と考えられます。



▲土器が見つかった様子

工房跡からみつかった、赤い色の須恵器が散らばっている様子。殆どが比較的大きな甕の破片で、数力所の床からみつかっています。



▲落とし穴

動物を捕らえるために使われた落とし穴。斜面の上から下に向かって長い形をしています。杭を立てた穴が残っているものもありました。福島市内でも数多くみつかっています。

南諏訪原遺跡

■遺跡名……南諏訪原遺跡

■所在地……福島市松川町字南諏訪原

■時代……縄文時代・平安時代

■調査年……平成2～3年

詳しくは

ふくしまの歴史1

P 48～50・184・228



南諏訪原遺跡は松川小学校のたつ丘^{きゅう}にある、面積140,000㎡という大変広い遺跡です。発掘調査の結果、福島市で最も古い今から12,000年前の縄文土器や、今から2,500年前の縄文時代の終わり頃のムラの跡、さらに奈良時代から平安時代にかけてのムラのあとなどが見つかりました。



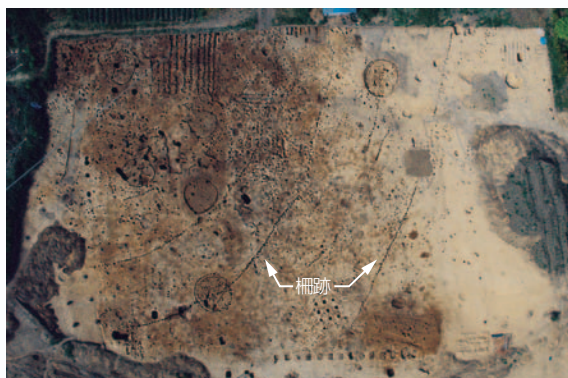
▲東方上空からの南諏訪原遺跡

遺跡のある部分は丘陵で、まわりの水田よりも高くなっている。中央のピンク色の部分が発掘調査した範囲。

縄文時代

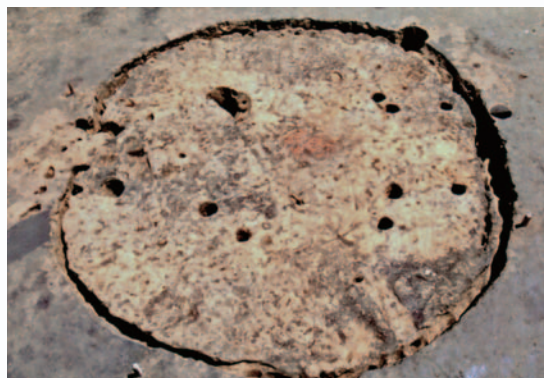
南諏訪原遺跡から見つかった一番古い土器は、土器の外側に細い粘土のひもを何段にも貼り付けて文様をつけた土器です。そのほか、指の爪や棒に紐を巻き付けたものを土器の表面に押し付けて文様をつけた土器なども一緒に見つかっています。

縄文時代晩期^{ばんき}のむらからは竪穴住居が9棟、掘立柱建物が8棟見つかっています。竪穴住居は住まいとして、掘立柱建物は倉庫や集会所として使われていたと考えられます。むらは柵^{さく}で丸く囲われていますが、柵は何重にもなっているので、小さなむらが次第に大きくなるたびに、柵をつくりかえたのかもしれません。



▲南諏訪原遺跡遺構

上空から見た縄文時代晩期のむらのあと。小さな穴が弧状にならんだ柵の内側に竪穴住居跡や掘立柱建物跡がある。



▲縄文時代晩期の竪穴住居跡

直径5.5mほどのまるい竪穴住居で、中央の赤くなった部分はいろりの跡。壁際には溝が掘られているが、左側の溝が切れているところが入り口。



▲縄文時代晩期の土器

およそ4500年前につくられた土器。土器は大きさも様々で煮炊きに使う深い鉢形のものだけではなく、食べ物を盛りつけたりするときに使うと考えられる浅いボール鉢形の土器や、壺など様々な形のものがあります。

また、1棟だけ6本柱の六角形の建物が見つっています。太い柱を使っている事からこの建物がむらで一番高くて大きな建物であったと考えられます。

奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代にかけてのむらは、水原川をのぞむ丘陵の南側の斜面につくられていました。

竪穴住居は全部で43軒見つっています。住居跡は四角形で、壁際には煮炊きに使うカマドが作りつけられています。住居からは稲刈りに使う鉄製の鎌が見つっており、むらの南側の低地では水田が営まれていたと考えられます。また、水がわく場所には井戸のような大きな穴が掘られ、水がためられています。あふれた水は木組みをつたって水田に流



▲奈良時代の竪穴住居の跡

1辺が4mほどの四角形の竪穴住居で、深さは70cmほどである。壁際にカマドがつくれ、カマドから住居の外に煙を出す煙道（えんどう）がのびる。

れ込んでいたようです。木組みのまわりからは土師器や須恵器の坏がたくさん見つっています。墨で「財(たから)」や「正」「信夫山南」と書かれたものもありました。



▲南諏訪原遺跡の水を引く施設

右側のまるい穴にたまったわき水が左側にながれ、水田にそそぎ込む。途中の四角い木の枠にたまった水は生活に使っていたと考えられる。



▲南諏訪原遺跡出土墨書土器

筆字で「信夫山南」と書かれた平安時代の土器

仙台内前遺跡

■遺跡名……仙台内前遺跡

■時 代……縄文時代

■所在地……福島市松川町字仙台内前

■調査年……昭和60年、62年



仙台内前遺跡は、水原小学校の南約600mに位置します。昭和62年の発掘調査で、縄文時代草創期の竪穴住居1棟と平安時代の竪穴住居1棟、縄文時代、中世、近世の土坑などが見つかりました。また、縄文時代草創期の石器を製作したあとも見つっています。

縄文時代草創期の竪穴住居は、現在のところ、福島市内では最古のもので、年代測定により約10,000年前に使われたと考えられています。大きさは4×3.2mの大きさで、火をたいた跡は見つかりません。

石器製作跡からは、石器を製作するために石を割った際のかげらや石くずとともに、磨製石斧、打製石斧、石鏃などの石器も発見されています。中には、磨製石斧と半円形をした石器が重ねられた場所も発見されています。



▲福島市最古の住居跡

縄文時代の始まりころの住居跡。地面を浅く掘りくぼめた跡と、柱を立てた跡だけが残っている。松川町水原・仙台内前遺跡。福島市最古の住居跡

石器製作跡は、長い期間にわたり石器が製作されたのではなく、一時的に石器が製作された場所であると考えられます。

縄文時代草創期の土器は、爪形文と呼ばれるもので、いずれも破片でしたが、石器製作跡、竪穴住居周辺から出土しています。

仙台内前遺跡出土の縄文時代草創期の石器と土器は、県重要文化財に指定されています。



▲石器埋納状況



▲草創期の石器

小倉向 A 遺跡

■遺跡名……小倉向 A 遺跡

■時 代……縄文時代

■所在地……福島市松川町水原字小倉向

■調査年……平成11年



こぐらむかい
小倉向 A 遺跡は福島市松川町水原地区の南方にある遺跡です。発掘調査により縄文時代前期の初めごろのムラのあとが見つかりました。近くのうわだい字輪台遺跡で見つかった縄文時代前期のムラよりも、やや古いムラです。^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居は2×3mほどの小さなものが5棟、長さ6m以上もある大型のものが1棟見つかりました。小さな住居は家族がふだん生活する家で、大型の住居はムラの集会や、ムラの人々が集まって共同作業をするときなどに使われたのではないかと考えられています。また、住居跡の中や外で石器を作るときに生じる細かな石のかけらが大量にみつき、近くで石器を作っていたと思われます。



▲調査風景

遺跡は南東側に下るなだらかな傾斜地に広がっています。日当たりもよく、住みやすい場所だったと思われます。



▲1号住居跡

2.1m×2.8mほどの小さな住居跡で、真ん中に柱を立てた穴が見つかりました。家族が生活する一般的な住居跡と思われます。



▲3号住居跡

長さ6m以上、幅4m、深さは80cmあります。床には壁際に柱の穴がたくさん見つかり、また火を焚いた跡も2箇所見つかりました。ムラの集会や、共同作業の場として使われたと考えられています。



▲見つかった縄文土器

見つかった土器の多くは器の厚さが薄めで、ループ文と呼ばれる逆U字や、矢羽状の文様などが見られます。

宇輪台遺跡

■遺跡名……宇輪台遺跡

■所在地……福島市松川町水原字右輪台

■時代……縄文時代前期・中期、江戸時代

■調査年……平成2年、平成3年

詳しくは

ふくしまの歴史1 原始・古代
P 26～29・77に掲載



宇輪台遺跡は、笹森山地から東側に連続する丘陵に位置しています。昔から土器や矢じりが拾えるところとして知られていました。これまでに2度の発掘調査が行われています。調査の結果、約5,500年前の縄文時代前期と約4,000年前の縄文時代中期にムラが営まれていたことが分かりました。ムラは日当たりの良い南斜面で、丘陵頂上付近の平らなところで見つかっています。



▲宇輪台遺跡空撮

東側から撮影しました。西側の笹森山から舌状に張り出した丘陵地です。

約5,500年前の縄文時代前期の竪穴住居は長さ4m、幅3mと、長さ約10m、幅4mの2種類見つかっています。大きい家は、普通の家ではなくムラの人たちが集まる集会場や共同の作業場だったと考える人もいます。



◀竪穴住居

約5,500年前縄文時代前期の竪穴住居。南側半分は、調査されていませんが、長さ約10m、深さ約1mの大型の住居です。壁際には柱を立てた穴がたくさん見つかっています。

約4,000年前の縄文時代中期のムラでは9棟の竪穴住居が発見されています。形は長方形ではなく円形に近い形をしています。大きさは、約4m～6mぐらいです。この時期の家の最大の特徴は土器のまわりに大小の川原石を並べて作られた複式炉と呼ばれる炉があることです。また、柱

の立て方にも特徴があります。縄文時代前期は壁際に連続して立てられていましたが、この時期には、大きい柱の穴が炉を囲んで柱が立てられています。

宇輪台遺跡からは、市内でもっとも古い土偶も見つかっています。土偶は土で作られた人形で縄文人のおまじないの道具として使われたものと思われます。

また、多量の縄文土器も出土しています。約5,500年前の土器の多く

は口の部分が山のように尖り胴の所にくびれがあります。約4,000年前の土器は、口が平らで胴のところにあまりくびれないスマートな形をしています。

その他には、縄文時代の動物をとるために掘られた落とし穴状土坑なども見つかっています。



▲複式炉を持つ竪穴住居跡

約4,000年前の縄文時代中期の竪穴住居跡です。中に石と土器で作られた複式炉があります。

この複式炉は、約4,500年前ごろ東北地方の南部を中心に北陸地方まで流行した炉です。宇輪台遺跡以外でも岡島の宮畑遺跡、飯坂の月崎遺跡、荒井の愛宕原遺跡など福島市内でもたくさん見つかっています。



▲縄文時代前期の土偶

顔の部分をへこませてあるだけの簡単な土偶です。乳房がつけられていることから女性と見られます。無事に出産ができるためにつくられたものと思われます。



▲約5,500年前の縄文時代前期の深鉢

山状の口の部分に穴が開けてあります。胴がくびれ模様は縄目の他に棒で線を引いたり、棒の先でくぼみを付けたりするものもあります。

和台遺跡

■遺跡名……和台遺跡

■所在地……福島市飯野町明治字南和台、北和台、北向、長根

■時代……旧石器時代、縄文時代、平安時代

■調査年……昭和44年、昭和49年、昭和51年、平成8年～平成14年

詳しくは
ふくしまの歴史1 原始・古代 P 38に掲載



わだいいせきのぞ たかだい
和台遺跡は阿武隈川を臨む高台に位置しています。

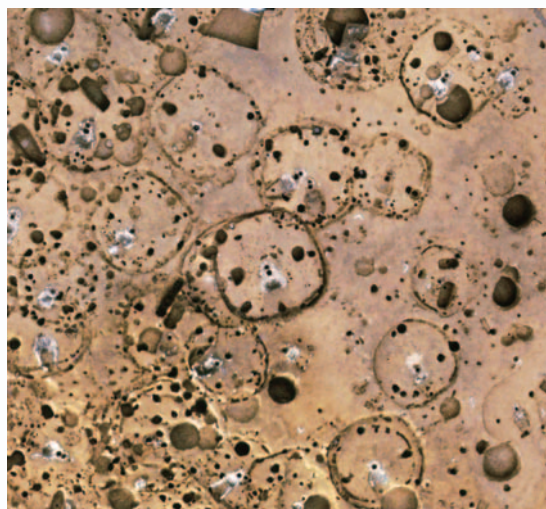
発掘調査により、福島県の縄文時代では最多となる230棟を超える^{とう}竪穴住居、^{たてあなじゅうきょ}掘立^{ほったて}柱建物、^{ばしらたもの}子供の墓と思われる^{うめがめ}埋甕、^{いこう}食べ物をためておくための^{ちようけつ}貯蔵穴、^と動物を捕るための^{おとし}落とし穴、土器捨て場など多数の遺構が見つかりました。縄文時代中期（約4000年前）のムラは、中央に広場があり、広場の外側に掘立柱建物群、竪穴住居群が広がっています。斜面部には貯蔵穴や落とし穴、土器捨て場などが作られており、計画性のあるムラづくりがされていました。

数多くの縄文土器や石器、動物の骨、クリの実なども見つっていますが、中でも



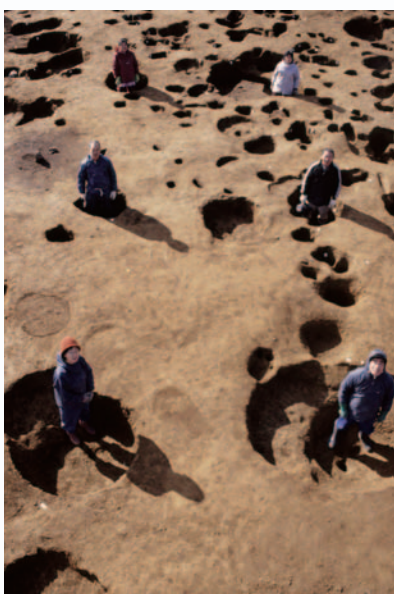
▲和台遺跡の位置

右上を流れるのが阿武隈川。和台縄文人は川のすぐ脇の高台にムラを作りました。



▲密集して見つかった竪穴住居跡

この写真の中に30棟の竪穴住居が隠れています。



◀掘立柱建物跡

同時期の竪穴住居が多く見つかったので、家ではなく、食べ物を貯える倉庫のような施設と考えられます。



▲見つかった竪穴住居

和台遺跡の住居の平均的な大きさは、直径5.0m。タタミ約20枚分の面積です。

じんたいもん ど き しゅりょうもん ど き
人体文土器と狩猟文土器は非常に珍しいものです。

人体文土器は粘土の貼り付けにより人の全身像を
描いた縄文土器で、縄文人の信仰の象徴として祭ら
れた特殊な土器です。狩猟文土器は縄文人の狩猟の
様子を描いた土器で、福島県では初の出土品です。
従来の説では青森県や岩手県など北東北独特の土器
と考えられていましたが、年代的にも北東北の土器
よりも古いことがわかりました。

また、遺跡の周辺では手に入らない海の魚の骨、
関東地方からもたらされた黒曜石という石材、国内
では新潟県でしか産出しないヒスイ、関東地方や北
陸地方の文様のついた土器も見つかっており、和台
遺跡の縄文人は遠隔地とも広く交流していたことが
わかっています。

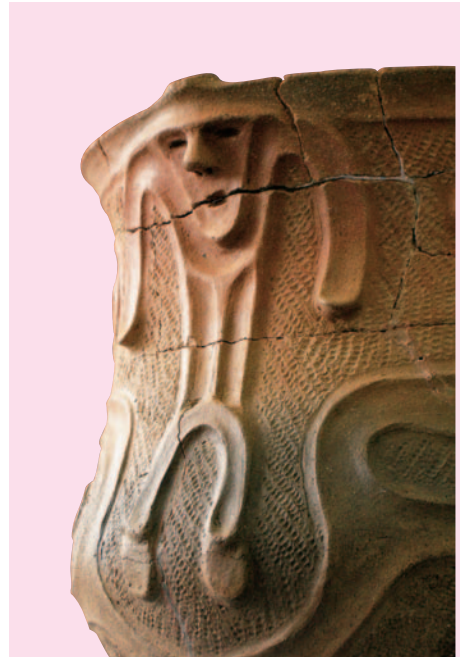
ただし、和台遺跡は山あいの縄文ムラであり、ど
こからでも遺跡が見える風景というわけではありま
せん。和台遺跡は、二本松市など阿武隈川沿いのム
ラと伊達郡の山間部のムラの中継地の役割を果たし
た拠点的なムラと考えられます。

このように、和台遺跡は縄文時代中期のムラ全体の
様子、縄文人の精神生活などを知る上で貴重な遺跡
であることから、平成18年に国史跡となっています。



▲ヒスイ

日本国内では新潟県でしか産出しません。和台縄文人は遠く
の地方の特産物の情報も知っていたことがわかります。



▲人体文土器

人体部分は身長20cm。土器から浮かび上がる
ような立体的な表現をしています。



▲狩猟文土器

狩猟の成功や安全、獲物となる動物を吊るため
の祭りを行うために作られた土器です。



▲縄文人のアクセサリ

首飾りや耳飾りなどのアクセサリをつけてい
ましたが、金属はないため粘土や石を素材とし
て使っていました。

白山遺跡

■遺跡名……白山遺跡

■所在地……福島市飯野町字白山、
北稲神

■時代……縄文時代

■調査年……昭和32年



白山遺跡は、和台遺跡と女神川を挟んだ対岸にあり、和台遺跡と同じ縄文時代中期（約4000年前）のムラです。和台遺跡と白山遺跡の縄文人は日常的に川の兩岸を行き来して日常生活を送っていたと考えられます。

昭和32年の発掘で、竪穴住居跡の柱穴や溝とともに、土器と埋めた炉、石囲いの炉がセットとなった巨大な炉が見つかりました。このような炉は、全国でも見つかったことがなかったため、その後、考古学者らにより「複式炉」と命名されました。複式炉は福島県の縄文時代中期に特徴的な炉のかたちで、現在も考古学の専門用語として使用されています。

また、昭和33年には福島県で第1号となる復元住居が建てられ、「飯野白山住居」として福島県指定の史跡となりました。



▲白山遺跡の復元住居

現在の復元住居は2代目。30年に一度は全体の改修、15年に一度程度はカヤのふきかえを行っています。



▲白山遺跡の複式炉

右側は2つの縄文土器が埋められ、左側は石囲いの炉となっています。



▲当時の発掘風景

住居を復元する時には、飯野地区の中学生達が材料の運搬などを手伝いました。

はっちょうのめじょうあと 八丁目城跡

■遺跡名……八丁目城跡

■所在地……福島市松川町字伊藤

■時代……戦国時代

■調査年……平成16・17年(試掘調査)

詳しくは

ふくしまの歴史2 中世
p 44・73・96・107・133・
242に掲載



八丁目城跡は、松陵中学校の北西約200mの位置、松川地区体育館（旧松川小学校跡地）の西側から北にかけて連なる尾根上にあります。南北450m、東西400mの大きな山城で、本丸・帶曲輪・空堀など、城の防備施設が現在もよく残っています。

八丁目城は、戦国時代（16世紀）に伊達植宗（伊達氏第14代）が築いたとみられる城です。八丁目城が歴史上重要な役割を果たしたのは、伊達植宗と晴宗父子の争いをきっかけに始まった天文の乱（1542年～1548年）においてで、城は植宗方と晴宗方の攻防の中心地となり、激戦が続きました。天文の乱の後も、伊達政宗（伊達氏第17代）が安達郡を支配するまで、二本松領と伊達領の境界線を守るための重要な城でしたが、天正18（1590）年、豊臣秀吉の奥羽仕置により壊され、その歴史を閉じました。

現在の松川町の町すじは、かつては、八丁目城が築かれた時につくられた城下町で、八丁目宿と呼ばれました。この町は江戸時代まで続き、奥州街道を代表する宿場町としてにぎわいました。



▲八丁目城跡全景

南東から見た八丁目城跡。頂部の中央からやや右寄りのところが本丸跡。山すそ右手の赤い屋根の建物は松川地区体育館。



▲八丁目城跡から安達方面を望む

中央は松川町の町すじ、右手の道路は県道福島安達線。左端に見える丘陵は土合館跡。

用語説明

縄文時代 …… 縄文時代は、今から約12,000年～2,300年前まで、約1万年間続いた時代です。古い方から、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と6つの時期区分がなされています。縄文人は竪穴住居に住み、狩りや木の実の採集を中心とした生活をしていました。また、この時代から土器を使い始めました。

竪穴住居 …… 地面を掘りくぼめて床とし、柱を建て、その上に屋根をかけた家。発掘調査では、外周の溝、柱の穴、炉などが見つかります。

掘立柱建物 …… 現代の建物と同じく、柱を四方にめぐらせて建てた建物。発掘調査では柱の穴が規則的に並んで見つかります。

館跡・城館跡 …… 鎌倉時代から室町時代にかけて、武士や地域の有力者が住んでいた場所。堀や土塁など戦争に備えた防御施設があり、屋敷や倉庫などいくつかの建物が建てられていました。

縄文土器 …… 縄文時代に使われていた素焼きの土器で、外側に縄を転がした文様をつけたものが多いことからこの名前がつけられました。調理や食べ物の貯蔵などに使われました。

土師器 …… 古墳時代から平安時代に使われた素焼きの土器で、茶碗のような杯、鍋のように煮炊きに使われた甕など、日常的な使い方をしていました。

須恵器 …… 古墳時代のはじめに朝鮮半島から製作技術が伝わった土器です。ロクロを使用して形を作り、窯により高温で焼かれました。土器よりも硬く灰色をしており、杯・甕・壺・蓋などの形があります。

青磁・白磁 …… 石の粉を原料として形を作り、焼いたやきもの。青磁は鉄分を含んだうわぐすりを使い、緑色をしています。白磁は透明なうわぐすりを使い、白い色をしています。

杯 …… お碗のような形をした食事の時に使う土器。

落とし穴状土坑 …… 動物を捕るために掘った穴。形は円形・楕円形・長楕円形・長方形のものがあ、底に杭（さかもぎ）を立てた痕があります。深さは深いもので2mのものもあります。

瓦窯跡 …… 瓦を焼くために作られた窯。

炭窯跡 …… 燃料である炭を作るために作られた窯。

複式炉 …… 縄文時代の中期の終わり頃（約4,500年前）に東北地方南部を中心に流行した大型の囲炉裏。土器を埋め、石を組み合わせで作られています。土器を埋めた部分は置き火を入れる場所、石を組んだ部分は煮炊きをする場所と、土を掘りくぼめた部分は作業する場所と考えられています。

土偶 …… 縄文時代に作られた粘土でできた人形。乳房が付いており、女性の形をしていることが多い。おなかの大きなものが多いことから

出産のお守りとして作られた、あるいは、壊れて見つかることが多いので怪我をした部分を身代わりとしたなど、様々な説があります。

ほん 本 **まる 丸** …… 城館に造られた平場に付けられた名前のひとつ。その城館で最も大事な平場と考えられます。

くる 曲 **わ 輪** …… 城館に作られた平らな場所。日常生活をする屋敷、戦争の場合の兵の駐屯地として使われました。

おび 帯 **ぐる 曲** **わ 輪** …… 城館が造られた山の斜面に細長く帯のように作られた曲輪で、城内の通路や戦争の時に敵を待ち伏せる場所として使われました。

ど 土 **るい 塁** …… 敵が攻めてくるのを防ぐため土を付き固めた壁。

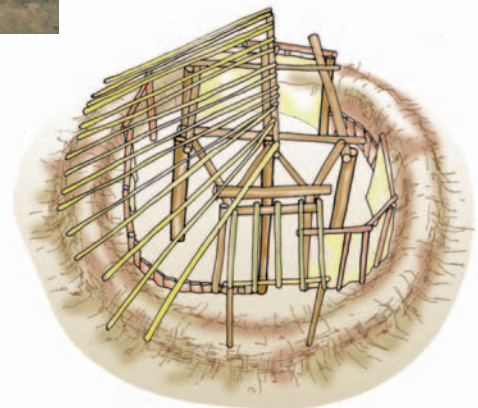
から 空 **ぼり 堀** …… 敵が攻めてくるのを防ぐための大きな溝で、水が入っていないもの。

おう 奥 **う し おき 羽 仕 置** …… 天正18年（1590）、豊臣秀吉は小田原城を攻め、北条氏を滅ぼしました。その後、宇都宮城や会津黒川城（後の会津若松城）で行った陸奥・出羽（東北地方）の大名の配置換えのこと。これにより、領地を取り上げられた大名もあり、使用が禁止され壊された城館も多数ありました。

しゅく 宿 **ば 場** **まち 町** …… 江戸時代に幕府が街道沿いに定めた町。人々が街道を通行する時に必要となる運送業務・休憩所・宿泊施設などが集められた。福島市周辺では八丁目宿（松川町）や瀬ノ上宿が有名です。



掘立柱建物



竪穴住居

全国の主な出来事と福島市内の遺跡年表

全国の主な出来事

福島市内の遺跡年表

氷河期が終わる		旧石器時代	学壇遺跡
土器、弓矢の使用 竪穴住居の出現	10000年	縄文時代	仙台内前遺跡 月崎遺跡 和台遺跡 宮畑遺跡 上岡遺跡
稲作・金属器の使用が始まる 各地に小さな国ができる	300年 紀元前 紀元後	弥生時代	大平・後関遺跡 青柳遺跡 勝口前畑遺跡
大和国家の統一が進む 古墳が作られる 法隆寺が作られる 大化の改新	300年	古墳時代	鎧塚遺跡 月ノ輪山1号墳 腰浜廃寺
奈良に都が移される 荘園ができ始める	710年	奈良時代	台畑遺跡
京都に都が移される 藤原道長が摂政になる 平氏が滅びる	794年	平安時代	西原廃寺跡 岩崎町遺跡
源頼朝が征夷大將軍となる 元寇（文永の役、弘安の役）	1192年	鎌倉時代	大鳥城跡
足利尊氏が征夷大將軍となる	1338年	室町時代	
豊臣秀吉が全国を統一する 関が原の戦い		戦国時代	鎌田館跡
徳川家康が征夷大將軍になる	1600年	江戸時代	福島城跡 岸窯跡
明治維新	1868年	明治時代	
	1912年	大正時代	
	1926年	昭和時代	
	1989年	平成時代	

福島市の遺跡 3

発行者 福島市教育委員会
発行日 平成22年3月